



### III 新 月 会

男声合唱組曲「中原中也の詩から」

- |     |            |     |         |  |
|-----|------------|-----|---------|--|
| I   | 北 の 海      |     |         |  |
| II  | 汚れちまった悲しみに |     |         |  |
| III | 朝 鮮 女      |     |         |  |
| IV  | 雲 雀        | 作 詩 | 中 原 中 也 |  |
| V   | 六 月 の 雨    | 作 曲 | 多 田 武 彦 |  |
| VI  | 月 の 光      | 指 揮 | 小 池 義 郎 |  |

### ■ 新 月 会

男声合唱組曲「中原中也の詩から」について

多 田 武 彦

中也の詩に接したのは、いまからもう20年も前のことである。先輩の先生がたと同じように、私も中原中也の詩に惹かれ、作曲をしようと思い、いくつかの曲のモチーフだけは随分前にもう出来あがっていた。しかし、「心の中に、何かジーンとしたものを残してゆく中也の詩の深さ」を表現するには、私の技倆は未熟だった。昭和34年、東京コラリアーズの委嘱により書いた組曲「在りし日の歌」は、確かに好評ではあったが、自分では、曲のむづかしい割に、内容を十分表現しきれなかったと思っている。

所で、処女作「柳河風俗詩」以降の私の創作活動は、昭和38年、組曲「京都」で芸術祭奨励賞を得て以来ここ3年間、停止していた。それまで1曲ごとに、色々な人からの忠告や助言に従って一步一步技術的水準を上げていこうとした私は、「京都」を書いた後、「京都」以上の技術的水準の高い組曲はもう私には書けないと判断してしまっていた。

ところが一方では、「多田さんの曲は1作ごとに難しく、親しみにくくなってゆく。『柳河風俗詩』や『中勘助の詩から』のような初心者でも或る程度の練習を積めば歌うことができ、しかも、かおりの高い組曲をいつまでも書き続けてほしい」という声や手紙が、主に大学のグリークラブの方々から寄せられていた。

こうした事に応える曲を書くことが、当面の仕事だと思いついた私は、ここ数ヶ月の間に組曲を3つ作曲した。すべて私の持てる力量を駆使した、私として満足のゆく組曲であるが、その中の1つが、今日関西学院グリークラブによって演奏される「中原中也の詩から」である。

中也の詩を基にした作曲や演奏に際しては、「中也の、全く追いつめられた人生の中から昇華されて生まれ出て行く冷徹なまでに美しい抒情性」を如何にして表現するか、ということが最も大切であり、私はこの一見簡略な手法を用いた組曲の中に、それを十分試みた積りである。演奏も、こうした抒情性の表現には抜群の冴えをもつ北村協一氏と、ここ数年、こうした抒情的表現力に益々磨きのかかって来た関学グリーの名コンビによって行われる機会を得ることが出来たことは何よりも嬉しい。聴後の忌憚のないご批判を乞う。

(1967年6月関西学院グリークラブ初演プログラムより)